

## 『免疫学者のパリ心景 新しい「知のエティック」を求めて』

矢倉英隆 著

●定価 3,960 円(税込) ●四六判 362 頁 ●医歯薬出版刊

●発行年月：2022 年 6 月 ●ISBN978-4-263-20688-1



## 読者の人生に大きなインパクトを与える叢智の書

この本が出版されたことに大いに歓喜している人間の一人である。本書の梱包を解いてからは、まさに、一気に読み切ってしまった。この面白さあるいは感動のようなものは何なのか？ かつて経験したことがあるような気がして、記憶の糸を辿ってみて……思い出すことができた。それは、まだ小学生だった私が、小澤征爾のエッセイ『ボクの音楽武者修行』（1962年初版）に出会ったときに味わった感覚だった。弱冠 24 歳の小澤青年が「西洋音楽をやるためにはその音楽の生まれた土地に住む人間をじかに知りたい」という信念から、スクーターでのヨーロッパ一人旅に向かい、ブザンソン国際コンクールの指揮部門で優勝し、カラヤンやバーンスタインに出会い、NY フィル副指揮者に就任するまでを語った自伝的エッセイであるが、そこには、若き日のマエストロの挑戦が、音楽をできる喜び、尊敬する人々との触れ合いとともに鮮やかに描かれ、彼が飛び込んだ欧州さらに米国での経験の瑞々しい描写は、私がのちに海外での自分の力試しを夢見て 30 代を米国 Boston 近郊での研究生活に身を置くことになる、その大きな動機にさえた。

もちろん、矢倉氏が語る新天地フランスでの「全的生活」としての思索の旅は、当然ながら、芸術家の目指した旅とは異なり、若き日の小澤青年とは年齢も全く違うため、この両書を同じ次元で扱うのは、ある意味、不謹慎の誹りを免れないが、しかしながら、今世の人生 100 年の時代において、氏が自ら半生の栄光の業績を投げ捨てて、(若き日のマエストロのように?) 後先を顧みずに、新天地パリでの新しい学究生活を求め、自らのモチーフと、心の赴くところに従って、新たな挑戦を開始し、しかも、新たな運命の糸に操られるように、形而上学の伝統のアカデミズムに舟を漕ぎ出してゆく雄姿を読み解くのは、実に感動ものである。事程左様に、読者の人生に大きなインパクトを与える書であることは間違いない。

今回の出版に先立って、氏は、この新たな旅路を「人類の遺産に分け入る旅」と呼び、科学と哲学の“Grenzgebiet”に遊ぶ科学者の視点から、一連の貴重なエッセイを書き下ろし、2012 年 2 月より本誌での連載を開始された(医学のあゆみ 240(6): 549-552, 2012~280(11): 1200-1203, 2022)。このエッセイは、全てが、氏のオリジナルの知的生活の報告書であり、氏の学びの体験と思索の歴史である。この、エッセイ・シリーズ「パリから見えるこの世界(Un regard de Paris sur ce monde)」No. 001-105 は、一貫通貫の 105 通の珠玉の「思惟」の便りであり、いずれの回も、「哲学と科学」に関する卓越したセミナーとなっており、私は、実は、勤務先の若い physician scientist たちにもそのエッセイを紹介しているが、彼らからの思慮に富んだレスポンスには刮目する。ぜひ、これを、臨床医・研究医を問わず、多くの若い医師・医学者・科学者に読んでいただきたいと願っている。

言うなれば、このたび上梓された本書は、そのエッセイ・シリーズへ誘(いざな)うための前奏曲 *prélude* ともいうべき書であり、したがって、本書を読了の暁には、引き続き、願わくは、「パリから見えるこの世界」のエッセイ・シリーズ No. 001-105 も紐解いてもらいたいと思う。

著者の矢倉氏は、もとより著名な免疫学者であることは言を俟たないが、私が、氏の新しい知的活動・思索生活を知り、かつ氏のエッセイ・シリーズの存在を知ることになった契機は、2012年12月に開催された第41回日本免疫学会(神戸)における氏の招待セミナー「免疫を説明する」であった。その視点と俯瞰する世界の新しさに大いに魅了され、講演後に氏にお会いして感想を伝えさせていただいたのが端緒である(これを機に、畏れ多くも、氏のエッセイをめぐって、氏との *correspondence* が続くことになる)。このときの氏の講演によって、日本の多くの若手研究者が免疫学の本来の魅力と広大な影響力に開眼し、これからの本邦の真の免疫学の発展に参画し貢献してくれることを願った次第である。

研究者の端くれとして、私も、免疫学領域の基礎研究に携わってきた個人歴から、免疫学の根幹が哲学的な発想に起源をもつことは、少なからず理解できる立場にあり、免疫学研究の、他の分野には見られない醍醐味は、その複雑性・多様性を包含するシステムの普遍性を求めるところにあるのではないかと感じている。そして、そこに、人間的な、あるいは形而上学的な、思索というものの入り込む素地が存在するのではないかと思われる。近年の、実利的・物質的な研究が隆盛を極めていく日本の医学研究の現状を見ると、ややもすれば、大局的・俯瞰的な視点が希薄になってしまっているのではないかと危惧する一人である。かつて、日本の免疫学を推進してきた多田富雄先生たちの世代、いわば研究者としての品格をもつカリスマ的な先達が、第一線から姿を消していることも要因の一つかも知れない。こうした免疫学の著しく変遷する時間軸の中において、上記学会で披露された氏のレクチャーは大変意義深い歴史的説法であり、そのエッセンスは、この書の中に鏤(ちりば)められている。

本書の巻頭にも掲げられているが、これは、恐らくは矢倉氏にとっての寸鉄とも言えるエピソードであろう：

「偶然は存在しない。あるのは約束された出遭いだけだ」*«Le hasard n'existe pas, il n'y a que des rendez-vous»* — ポール・エリュアール (Paul Éluard)

すべてが必然に見える偶然の積み重ねを経て、パリ大学から入学を許可されるに至ったことを彼はエッセイの中で述べているが、しかしながら、それは、氏の半生を彩った、免疫学に捧げた精力的な研究生活と、自然科学のみならぬ生命科学への繊細な感性と思索がなければ到達しえない出会いと言えるであろう。氏は、それを機に、固有の経験と洞察力と知的好奇心を十二分に生かして哲学を科学する道に分け入っていくことになる。すなわち、思うに、ある意味、運命的な出会いは、ルイ・パスツールの言葉を借りるならば、「構えのある心」(the prepared mind)がなければならない。すなわち、*«Le hasard ne favorise que les esprits préparés»* (Louis Pasteur)「幸運の女神は準備している者にしか微笑まない」(邦訳)のだろうと思う。

ひょっとしたら、今、われわれが本書を手にし読むことができる幸運も、この未知の領域への好奇心という準備を、いささかなりとも無意識のうちに、われわれ自身が整えてきた結果なのかもしれない……。矢倉氏の弛まぬ思索と瞑想の旅が、次の、さらなる著作を生み、「哲学と科学」の真理に至る道標を、引き続き、われわれに啓示してくれることを楽しみにしている。

(武田 昭／国際医療福祉大学病院アレルギー-膠原病科，  
聖路加国際病院 Immuno-Rheumatology Center)